

「サフラヒヲハンヌ」の敬語性

船 城 俊太郎

一

『庭訓往来』は、一月の往状の、つぎのような文句からはじまる。

①春始御悦、向貴方先祝申候^{〔左衛門尉藤原・岩見守〕}。富貴万福、猶以幸甚々々。

(一月往状) 『庭訓往来』

江戸時代から明治初年まで、庭訓往来は、寺子屋などで習字の手本としてひろく使用されていたことはよく知られている。

「いろは」が、平仮名の字体およびその書法をまなぶためのものであったのに対し、庭訓往来は、御家流の漢字の書法を手習うと同時に「候文」をまなび、さらには世の中の百科的知識を身につけるためのものであったのである。江戸時代からつづいている庶民階層の諸家に残存する書籍を調査するばあいなどに、さまざまなかたちでこの文献が見いだされることが、それをものがたっている。したがって、これらの文句、特に最初の二句は、江戸時代ではおそらく「いろはにほへと……」について人口に膾炙した文句であつたらうとかんがえられる。

この最初の文句は、ロドリゲス『日本大文典』^{〔一〕}に引用されている。

○ Youannu (畢んぬ), Nu (ぬ), Nuru (ぬる) の三つの助辞の中で、最初のは書状に多く用ゐる。 Faruno fajimeno von yorokobi quifōni mucatte nadzu iuai mōxi sōrai youannu.

(春の初の御悦貴方に向つて先づ祝ひ申し候ひ畢んぬ。)

〔庭訓〕 (Teiquin) (第一巻・書きことばの活用)

このおなじ部分を、日本大文典はいま一箇所引用しているが(第一巻・存在動詞 *soo* (そ) 又は *soo* (候) の活用)、これらにより室町時代末のそのよみが確認される。

この文典においてこの文句がこのように引用されていることは、それがこの時期においてすでに一般にかなりよく知られたものであったことをしめすとおもわれる。また、ロドリゲス日本大文典が往来物から引用した用例八例のうち、『雑筆往来』からのもの二例のほかは、すべて庭訓往来からであるが、このことから、この時代に庭訓往来がすでに往来物の代表であつたらしいことが明瞭にうかがえる。ロドリゲス日本大文典のような、日本語全般について学習するための、実用的な文法書に

とつて、庭訓往来は、ある面の日本語の語彙を採集するのにもっとも適していたとおもわれる。したがって、さきにのべた江戸時代の状態は、おそらくは室町時代末にすでにかなりそれにちかいものになっていたのではないかと想像される。

右に示めた日本大文典における庭訓往来の引用は、「ヲハンヌ」を「完了」の助動詞「ぬ」と同様な機能の語と見てのそれである。この文典では「ヲハンヌ」について一貫してそのようなあつかいをしている。また、ロドリゲス日本大文典とおなじくイエズス会の出版物である『日葡辞書』も、まったく同様の記述をしているが、それは勿論あやまりではない。「ヲハンヌ」という語は、古代漢語における、動作の終了を言う「結果補語」の「畢」「訖」「了」などを、「ヲハル十ヌ」と訓読するところから生じたものである。〈結果補語〉は、動詞と助動詞の中間的な性格を有し、古代漢語のそれらのなから「了」が現代中国語の助動詞となった。したがって、それが基本的に「ぬ」などと近似の意味内容をもつことは必然のことである。

しかしながら、この稿の筆者は、この庭訓往来の例を単純にそのようなものとしてあつかうことに、いささか躊躇の念をいだく。その理由は、この稿の筆者には庭訓往来の当時に「ソウライヲワンヌ」とよまれたとおもわれる末尾の語句「候訖」などが、あまりに冗長なものに感じられるからである。

たしかにその「訖」は、事態がすでにおこったものであることを確実にしめしているであらう。しかし、このばあい、そのような事態の「完了」は、丁寧語「候」単独でもしめし得たはずである。たとえば、庭訓往来の一月復状の冒頭の部分につ

ぎのような文があるが、そこでの「候」はそのようなものである。

②改年之吉慶、被任御意候^①之条、先以目出度覚候^②。

この文の二例の「候」は、「ソウライヌ」とよまれたであらうが、それは、対者敬語・丁寧語としての機能のほかに、事態が過去におこったものであることを言っている。したがって、この例はまた、「ソウライヌ」とよむことも可能である。そのような「候」の例は、候文では枚挙にいとまがない。したがって、①の例の「訖」は、文の成立にとつてかならずしも必要のない要素なのである。

そこで、この稿の筆者が目をこらして見るに、この「候訖」からは「へりくだり」のニュアンスが感じられる。すなわち、この「候訖」には、〈過去・完了〉の時制的な意味とともに、「丁寧語」「候」が単独でもつ敬語的な意味とは、またちがつたそれが見いだされるのである。一月往状のこの文に言う「春始御悦」とは、元旦に若水をくみに戸外に出て、東の空にむかって新年の多幸をいのるそれであるかどうかは、この稿の筆者には明確ではない。しかし、なにしろ、それに類する行為を年賀状の相手のいる方向^③にむかってまずおこなったと、わざわざ書いてやるのである。それは相当な「へつらい」の言動であつたとおもわれる。そのような事態を言語表現としてかたちづくっているひとつの要素が、「候訖」であると感ずるのである。

なお、以後この稿では、「訖」「畢」「了」字が表記するその訓を「ヲハンヌ」で、「候」のそれは「サフラフ」で代表する。その理由は、この二つの語はこの稿で問題にする平安時代後期

から江戸時代にかけて、国語音韻史上の各種現象の影響などよりして、様々の語形を生起させており、それらを一々表記し合わせることは實際上不可能だからである。そして、それらの語形そのものは、この稿で論ずることがらと直接には関係しないとかんがえ、そのようないくつかの語形があらわれる事態については、便宜「ヲハンヌ」を歴史的仮名づかい形で、清濁の問題がからむ「サフラフ」は、歴史的仮名づかい形からさらに清濁表示を捨象した語形で表示しておくのが適當であるとかんがえるのである。また、それにあわせて、そのほかの古代語の表記もこの稿では歴史的仮名づかいによる。

二

前節に指摘した「サフラヒヲハンヌ」の敬語としての性格を、この稿の筆者は、この語形に成立した一つの用法であって、その文が表現することがらの影響によりそのようにうけとられる、見せかけのものではないとかんがえるが、そのことをたしかめるため、①の例以外の庭訓往来の用例を検討する。

この稿は、調査を新日本古典文学大系（岩波書店刊行）所収の庭訓往来（天文六年写本）に依拠するが、この本文では、庭訓往来には①のほかに、十四例の「ヲワンヌ」と読むとおもわれる「訖」「畢」が存する。これらの例は、伝本によっては、「了」で表記されたり、「訖」が「畢」になっていたたりすることがあるが、該当する位置に「ヲハンヌ」と訓じられる文字があらわれることがほとんどであり、それらをおなじものとして

あつかう。院政期ごろからの日本漢文諸文献の書写本には、そのように「ヲワンヌ」の「了」「畢」「訖」が、相互にいかかわる関係で書写されている例がしばしば見いだされる。ゆえに、このばあいの文字の異同は、日本漢文にあつては語法・文体などの問題とかかわらない、表記上の便宜、あるいは書道的な文字づらの美にかかわる問題とかんがえられるのである。なお、この稿で引用する文にほどこした句読点は、①②をふくめてこの稿の筆者の読解にもとづく。

- ③似谷鶯忘檐花、苑小蝶遊日影。頗背本意候訖。〔一月往状〕
④執筆発句賦物以下、才学未練之間、当座定可及亦面敷。聊可有用意之由事、承候訖。〔二月復状〕「監物丞源↓彈正忠」
⑤被仰下条々、具以承候訖。聊不可存等閑候也。

- 〔三月復状〕「左衛門志橘↓玄番允」
⑥抑、御下文御教書嚴重之間、入部使節無異儀、苅彼所令遵行候畢。〔同〕〔同〕

- ⑦材木者為虹梁之間、為杣取令詔候畢。〔同〕〔同〕
⑧次樹木事、梅、桃（中略）、柚以下、心之所及令尋殖候訖。〔同〕〔同〕

- ⑨被仰下之旨、畏拜見仕候畢。

- 〔四月復状〕「中務丞日奉↓采女正」
⑩故実之職者、一面輩可令雇給也。万事奉成父母之思畢。

- 〔五月往状〕「左京進平↓藏人將監」
⑪依之、近日欲令進発候処、此間戦場武具乗馬以下、尽員失候訖。〔六月往状〕「勘解由次官小野↓後藤兵部丞」

- ⑫弓者、本重藤塗籠、糸裏等也。加弦卷畢。〔六月復状〕

⑬ 依無指事、常不申通、疎略之至、驚入候之处、預芳問之条、珍重々々。日来本望忽以満足候訖。

(八月復狀)「散位長谷部(民部大輔) ↓ (加賀) 大掾」
⑭ 其体、殆令超過関東鶴岡八幡宮參詣候訖。

(八月單信)「左衛門尉 ↓ 大内記」
⑮ 芳札之旨、令披見候畢。
(九月復狀)「侍者 ↓ 平入道」

⑯ 御札之旨、承候畢。(十月復狀)「衣鉢侍者 某 ↓ 雅楽佐入道」
これらの例について、まず指摘されるのは、「ヲハヌ」を表記するとおもわれる「訖」「畢」が、ほとんどのばあいその直前に「候」をともなうことである。十五例中の十三例がこのかたちである。そして、そのうちの十二例からは、(過去・完了)の時制表現的な意味内容とともに、①のばあいとおなじようなニュアンスが感じられる。新日本文学大系の本文で「候」のない⑩も、それらと同様な感じがあるようにおもわれる。「候」をもつ⑭の例は、(へりくだり)というよりも、つよい尊敬的な意味あいを感じられる。わずかに⑫のみが、「候」をまたず、それらの敬語的なニュアンスが感じられない。

三

庭訓往来の、「候」をともなった「訖・畢」の例が、「候」単独のばあいとはことなる敬語的な性格をもつことは、それらが往状か復状の一方にしかあらわれないことによつてうらづけられるとおもわれる。たとえば、その典型的な例は三月復状に見る⑤、⑧の例であるが、これは、領主の莊園を管理する「政所

(「このばあい、左衛門志橘某」が京などにいる領主の家来から指示をうけて、いくつかの事項について処置したこと返事の文句である。領主に対する意識のゆえか、自分よりも上席の家来に対するためかはともかく、このかたちが上位者に対する敬意の問題と関係しているために、このような「候十訖・畢」の一方の書状にかたよる使用が生じるものとおもわれる。このかたちが、単なる「丁寧」＋「完了」をしめす機能になうものであるならば、このような現象はおこらないとかんがえられる。

また、それに付随して、それらを使用する書状の書き手が、全体的に見てその受けとり手と比較して、官職的に同等、乃至はそれ以下であることがおおいことも注意される。

ただし、このばあいは例外がある(⑪⑬)。そして、この問題については、古代律令制の官職の上下関係などが、南北朝時代から室町初期ごろに成立したとされる庭訓往来の、細部の語句についてまであてはまるのかという疑問も存するようにおもわれる。この稿の筆者はそのあたりの実態をにわか把握できない。したがって、官職の上下の問題からの断言は、このばあいさしひかえておきたい。

指摘したような庭訓往来の「サフラヒヲワンヌ」の敬語的な性格をうらづけるとおもわれるいま一つの現象は、それをもつ文の動作主体の人称が限定的であることである。すなわち、⑭をのぞく、⑫をふくめた十四例において、その文の動作主体が書状の書き手であること、つまり人称的に言えば一人称であることである。(へりくだり)の表現は、主に言語主体、あるいは

はそれがわに属するものの行為についてなされるものである。したがって、この現象は、庭訓往来の大部分の「サフラヒヲワシヌ」がへりくだりゝ的であることのうらづけと、確実になしうるものであるとかがえる。

例外となるかとおもわれる⑭は、動作主体（Ⅱ將軍家の石清水八幡参詣の様子）は人称的には三人称である。また、他の例がいわゆる謙讓語をともなうことがおおいのに対し、この例の場合は、尊敬語としての「令（シム）」をともなっており、尊敬の文と判断される。

しかし、謙讓語をともなう文の「サフラヒヲハシヌ」がへりくだりゝ的なニュアンスがつよいのに対し、このばあいの「サフラヒヲハシヌ」は尊敬や丁寧の意味あいをさらにつよめているものようにおもわれる。したがって、これは、人称と敬語の性格はちがついても、他の例とおなじように「サフラフ」単独のばあいとは相違する敬語的なそれをもつと、この稿の筆者はかんがえる。ちなみに、この文に言うことがらは、過去におこったことである。しかし、過去におこったものであることを、ことさらに明示する必要があるとおもわれない。

以上にのべたことをふまえて、庭訓往来のあらわれかたを模式的にしめし、その用例数もあわせ揭示すれば、つぎのようになる。「候訖・畢」などとするのは、「候訖」と「候畢」がともにあらわれ、用例数的に前者が後者よりもすくなくないことをしめす。

承十候訖・畢

(3)

尊敬表現十候訖

(1)

……候訖

(6)

謙讓表現十畢

(1)

……畢

(1)

このうち、「承十候訖・畢」は、「承（ウケタマハル）」が謙讓語の一つであるから、最初の項に合してもよいものである。

しかし、このかたちの例は、⑤に典型的に見るように、書状の冒頭に出現することがおおく、次章にしめす諸往来に多数見いだされ、実際の書状にも例がおおい注目すべき類型であるので、分離して掲出する。これが、表現的に特に気がつかわれる復状の冒頭におおいものであることは、「候訖・畢」のへりくだりゝ的な性格とその敬語性のつよさをしめす現象であるとかんがえる。

四

この節では、庭訓往来以前に成立したかとおもわれる往来物の「ヲハシヌ」の様相を、前節でしたようにして模式的にしめす。このばあい、文献は、年代をさかのぼる順をとってしめす。なお、この稿でのそれらの調査は、『高山寺古往来』以外は『日本教科書大系』所収の本文により、また、それらの撰者および成立年代についての説も、庭訓往来をふくめて、その解説に言うところにしたがう。

I 山密往来 (僧正実嚴撰・応安六年「一二七三」)

謙讓表現十候畢 (3)

……候畢 (2)

謙讓表現十訖・了 (6)

尊敬表現十了 (1)

……畢 (2)

II 手習学往来 (撰者不明・鎌倉時代中期か)

承十候畢 (2)

承十了 (1)

III 雑筆往来 (撰者不明・鎌倉中期か)

……畢・訖・了 (7)

IV 垂髪往来 (愚宝撰・建長五「一二五三」年)

謙讓表現十候畢・訖 (5)

承十候畢 (2)

……畢 (1)

V 新十二月往来 (後京極良経「一二〇六年没」撰?)

謙讓表現十候了 (4)

承十候了 (4)

尊敬表現十候了 (1)

……候了 (2)

VI 貴嶺問答 (中山忠親「一九五年没」撰・鎌倉初期か)

承十候了・畢 (15)

謙讓表現十畢 (1)

承十了・畢 (2)

尊敬表現十了・畢 (2)

……了・畢 (8)

VII 高山寺古往来 (撰者不明・鎌倉初期か)

承十了 (5)

……了・畢 (9)

VIII 東山往来 (定真「一二六寂」撰)

謙讓表現十畢・訖 (2)

承十畢・訖 (4)

……畢・訖 (4)

庭訓往来以前の成立とされる往来物は、そのほかにもおおいが、「訖」「畢」「了」の文字が見いだされないもの、あるいはそれが稀少なものもあり、そのようなものはとりあげない。特に、往来物中の最古のものとかんがえられる『明衡往来』は、現在の伝本には「候畢・訖」がかなりおおく見られるが、その本来より存在したとかんがえられる書状には、「畢」の単独用法が三例見いだされるのみであるので、この稿ではとりあげない。『和泉往来』にも本動詞の「了」が一例あるのみで

ある。

右にしめした往来物中の「ヲハンヌ」のあらわれかたには、それぞれに個性があるが、そのうち『新十二月往来』は、文字が「了」専用であることをのぞいて、その用法の様相はかなり庭訓往来にちかい。

『貴嶺問答』の「候了・畢」は、「承」につくかたちのみであり、しかも用例数がおおいことが注目される。このかたちは他の往来物にもおおい、さきにものべたように「サフラヒヲハンヌ」の性格をかんがえるばあい重要である。貴嶺問答は、よく指摘されるように「候字事、此字多者劣事云々」(第六五状)とその文例中で「候(サフラフ)」に言及している。そして、たしかに全体的に文中に「候」がすくないようである。しかし、「承」を承接する「候了・畢」のばあいのみは、「候」を省略できなかつたようである。このことは、「候了・畢」が、復状の冒頭部分において「承」にとつてほとんど欠くべからざるものであつたことをものがたっている。^⑬

『新十二月往来』には⑭とおなじように尊敬文に「候了」がつく例が存する。

(四月往状)

⑬更衣装束数十具、夜前被進院庁候了。

これも⑭とおなじく、つよい尊敬の表現の文としてよいようにおもわれる。

『雑筆往来』には「畢・訖・了」の単独用法の例しか存在せず、それらはすべて完了の用法のようにおもわれる。

『山密往来』には、つぎのような、動作の主体が三人称で「候畢」が使用されている文が存する。

⑬凡繙門、群集丹墀、成市候畢。

(第三条・往状)

⑭先年、浄土寺故慈勝大僧正、勤仕之後、断絶候畢。

(第十条・復状)

⑬の例は、自分とおなじ僧侶(繙門)ということ、自分がわのものについての「へりくだり」であるとおもわれるが、⑭からは「へりくだり」ともちがつて、結縁灌頂の儀式が断絶したことに対する不満のニュアンスが感じられる。

成立がふるいとかんがえられる高山寺古往来と東山往来には、「サフラヒヲハンヌ」は見いだせない。しかし、この稿の次節に見るところからすると、それが当時の実際の書状における実態であつたとは、かならずしも言えないようにおもわれる。

庭訓往来のばあいをふくめた、この調査全般から言えることは、「候了・畢・訖」がいわゆる謙讓表現にもなつてあらわれることがおおいことである。そのことは、この語法とそのニュアンスの成立が、謙讓表現と密接なかわりをもつことをしめしているとかんがえられる。

五

往来物以前の「候了・畢・訖」については、『平安遺文』をその CD-ROM 版(平成十年・東京堂出版)によつて調査してみた。それによれば、『平安遺文』におさめられた平安時代の文書には、「了」が全部で二三九一例、「畢」が一七八三例、「訖」が八八例検出される。

そのなかに「候畢」の例のはやいものとしては、つぎのものがある。

②⑩ 至于正文、社方有申、仍令下遣候畢。諸事不具、以上。

(三四六・左大弁藤原懷忠書狀・正暦二年)

しかし、これ以外の「サフラヒヲハナヌ」は、つぎにしめすように、すべて院政時代のものであり、②⑩の例は、文書に疑問が存するのではあるまいか。

②⑪ 件保雖荒地、賢田可開發之由、去春依申請、令補保司候了。

於今者、件保令奉免庄候也。委細含御使候了。恐々謹言。

(二二八二・加賀守藤原家道書狀・寛治三年)

②⑫ 本庄事、依東大寺八幡宮結衆等奏狀、重可問有政朝臣之由、被宣下候訖。即忽成宣旨下知候了。未進請文候、以此旨可令言上給之狀、如件。

(二六一七・左大史奉書・長治元年カ)

②⑬ 右、先可停宮田庄寄人妨由、被仰下候畢。以此旨可令言上御室給之狀、如件。

(二二三〇・関白藤原忠通御教書・天承二年)

「候了・畢・訖」の用例の数値を、院政期をほぼ二〇年区切りにして表としてしめす。このばあい「承候了・畢」を別してしめす。

承候了 1	承候畢 3	承候了 43	候了 1	候畢 25	候了 140	候了 1	候了 5	候了 6	候了 11	候了 53	候了 24	合計
一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	一人称	合計
						1						
		3	1					1				
				2	2	2	8	11				
		23		1	7	6	12	53				
1	3	13		5	8	2	9	24				
1	3	43	1	8	17	11	30	99				

ここでの用例数は、語形とともに動作・状態の主体の人称によって分類した。このばあい、動作の主体があきらかに文書の書き手の側の人物である例は、一人称にふくめた。二人称とすべき用例は、この稿の筆者は見いだしていない。これらの例も、第三・四節でおこなった方式により分類することもかんがえられたが、この時代以降の変体漢文に見られる、「令(シム)」「被(ル・ラル)」の用法の複雑さなどのゆえに、それがこの稿の筆者にはそれが不可能であるばあいがあるので、分類は文の主体の人称によった。しかしそれでも、社会経済史的な知識の不足などのゆえに、おぼつかないばあいもおおいが、大勢のあり様はしめし得たとおもっている。

この表で、主体が一人称としたものは、おおくがへりくだり」のニュアンスが感じられる文である。主体が三人称、としたのは、おおむね尊敬あるいは「受け身」の文であるが、なかにそのような文でないものも少数まじる。

②④ 以去十八日、能清差遣数多之軍兵、令乱入荒川庄河南、令殺害住人、苟取作麦候了。

(三九八二・僧某申状案・養和元年カ)

②⑤ 或追捕寺中之僧房、被成散々候之処、隱住僧等候之間、於去年者件寺領田畠三町許乍蒔種子荒捨候畢。

(四二二六・河内国通法寺愁状・元暦元年)

これらの例には、へりくだり」というよりも、①⑨とおなじく事態に対する不満・非難などの心情があらわされているとおもわれる。そのような例が院政時代にすでに存するとしてよいのではあるまいか。

また、この調査からはつぎのような例が見いだされた。

②⑥ 安田御庄住人為末御仏聖米田三反所当四斗四升四合、大炊戒勢本たしかに納了候了。

(三三〇二・大和国東大寺仏聖免田 田堵解・応保二年)

この例からは、「候了」の「了」には「おわる」という意味内容がほとんどなく、すでに「候了」で一つの連語として機能していたことが知られる。これは、「サフラヒヲハンヌ」が院政時代から一つのまとまりとして存在し、単なる「サフラフヲハンヌ」ともちがった意味で使用されていたとする、この稿のかんがえかたをうらづける。

文書中の用例は、文書の種類で言えば、書状(消息)中にと

りわけおおく、請文がそれにつき、奉書・院宣・御教書などがまじる。これは要するに、「サフラヒヲハンヌ」が書状乃至は書状様式の文書でおおくもちいられるということである。このような例が院政期からあらわれるのは、文書の残存がこの時代から飛躍的におおくなること、および「候文」の成立の問題が、密接にかかわっているからとかんがえられる。このような例は、『鎌倉遺文』などからも大量に見いだされる。

一方、漢文日記中にも、院政時代ごろから「候了」の例があらわれるようである。東京大学史料編纂所作成の「古記録フルテキストデータベース」によって検索してみると、はやい例としてつぎのようなものが見いだされる。

②⑦ 天晴、已刻許少納言知家、維摩会布施言申、承候了。白河行堂念仏初也。

(後二条師通記・応徳三年九月二十八日)

②⑧ 事為未発之先、此義能候敷。余答云、公卿定申旨謹承候了。大概不可過此。但彼内府定申旨、頗有其謂敷。

(殿暦・康和三年七月五日)

②⑨ 戌刻許藏人宗国来。明日御国忌云々、而可進御幣。余答云、奉候了。則退出。

(同・康和三年九月二十一日)

これらからも、指摘してきたようなへりくだり」のニュアンスが感じられるようにおもわれる。また、はやい例に「承(奉)候了」のかたちがおおいことも注意される。

平安時代のものとはされる文書には、偽文書がおおいとされるようであるが、このような漢文日記の例から見て、「サフラヒヲハンヌ」におけるそのような用法は、やはり院政時代からの「候」との共存にともなって成立したとかんがえてよいのでは

ないであらうか。

その後、漢文日記でも時代が下るにともなつてこのような例が次第におおくなるようである。たとえば、室町時代末の『言繼卿記』にはつぎのような例がある。この日記は、大永七年からはじまつており、これらはその最初の部分に存する例である。

③〇一日、(略)、〇昨日番之間、今朝残役共有之請取、御杯参御□へにて祝之。五時分退出了。御局々へ御礼参候了。〇看経候了。〇吉書候了。

(大永七年一月一日)

③〇九日、(略)、〇中御門父子礼来臨、三こん祝了。〇白山法印に天神十号受候了。本広橋にかり候。写候て、返了。〇

恵明院礼来臨候了。

(同・同・七日)

これらのばあいからこの時代の「候了」と「了」単独のばあいのちがいがよみとれるとおもわれる。ただし、この日記ではその後次第に「候了」がおおくなり、敬語的な意味はなくなつてしまひ、(過去・完了)の時制的表現としてすべてのばあいにそれがもちいられるようになる観がある。

六

院政時代末期以降の漢字仮名まじり文などには、「ヲハハヌ」はある程度用例を見るが(挙例省略)、「サフラヒヲハハヌ」があらわれることはほとんどない。調査は、語句索引の存在する軍記物語や著名な説話集にほとんどかぎられるが、つぎの二例が、現在この稿の筆者がさがし得たすべてである。

③② 仍年来の愁眉を開き、二期の安寧を得ん。書紙につくさず。

併令省略候畢。義経恐惶 謹言。

(寛一本平家物語・卷第十一・腰越)

③③ 終日ふかせて、拍子をあぐる所の事をしたためき。近方こに感申けり。元政、涙をながして悦事かぎりなし。さて元政云、右の樂は、けふしたまりぬ。秘曲をばみな伝教候了。(古今著聞集・管絃歌舞第七・太神基政秘曲を多近方に伝授の事)

しかし、③②は『腰越状』中のものであるから、本来は変体漢文の書状の例としなければならないものであらう。なお、面会を期待する際のきまり文句であつた「併(シカシナガラ)」とともに使用されているこの例には、義経の、頼朝に対する立場と心情がよくあらわされているとおもわれる。

『古今著聞集』は、基本的には和文体で著作されているが、部分的に変体漢文の文献が引用されていたり、その調子がつかつたりする。しかし、③③は和文体の部分に存して、他文章様式の混入の例とはかんがえられない。そして、この「候了」は、そのことに付随した特徴的な面をもつ。その一つは、この文献では丁寧語として「侍り」が常用されていることからして、それが単なる丁寧の「候」ではないことがわかることである。このばあいの「候」は、③⑥とおなじように「了」にともなつてあらわれていることと判断され、一組みの連語中のものであることがあきらかである。

さらに、この「候了」は、太神元政の多近方に対する会話中にあらわれるめづらしいものであるが、元政は、近方よりも十歳程度年長であり、伶人としての地位・たちばも近方におとる

とはおもわれない。実際、この説話における両者の言動を見ると、やはり元政の方が上位である。したがって、これは、元政の近方に対する「へりくだり」の意をしめすものではありえないことになる。

そこで文脈によりこの例を検討すると、そこには、近方やその息子たちに自分の伝承してきた秘曲を伝授し得た、元政の感激と安堵の感情が込められているのが感じられるのである。すなわち、この「候了」は、^{②③}^{②④}などとは逆に、よろこぶべきことに対する、いわば「満足」とでもいうべきニュアンスをもつ用法なのである。

^{③③}のような語法が当時の口頭語に実際に存したものであったかどうかは、いまのところ不明である。そして、このような、「サフラヒラハンヌ」としてはかなり特殊な用法がごく少数しか、中世の漢字仮名まじり文などに見いだされないのは、それらの文章様式では「サフラヒラハンヌ」の「へりくだり」の用法などが必要なかったということであろう。すなわち、そこには「つか（う）まつる」などによる「へりくだり」表現がすでに存していたから、それにより「サフラヒラハンヌ」と近似の表現が可能であったとかがえられる。

江戸時代では、太田牛一の『信長公記』につきのような用例を見いだした。

^{③④}辰刻に取寄、申の下刻迄攻させられ、御存分に落去候^レ訖。
御本陣へ御座候てそれもく^レと御説被成、感涙を流させられ候也。

（巻首・天文二十三年正月二十四日）
^{③⑤}其後且天下御為、且往還旅人御憐愍之儀を被思食、御分国

中に数多在之諸関諸役上させられ、都鄙之貴賤一同に奈と拝し奉満足仕候^レ訖。

（巻一・永禄十一年十月二十二日）
^{③⑥}辰刻御蔵開候へ^レ訖。彼名香六尺の長持に納り在之。則多門へ被持参御成之間、於舞台懸御目任本法一寸八分被切捕。

（巻七・天正二年三月二十八日）

^{③⑦}此代物を以て宇治川平等院の前に橋を懸可申の旨、宮内卿法印山口甚介兩人に被仰付、為末代に候間丈夫に可懸置旨、御説候^レ訖。

（巻十二・天正七年九月十四日）

この文献では、「サフラヒラハンヌ」はこの四例のみであるが、それらはすべて信長の行為にかかわるものである。

^{③⑧}は、天文二十三年に尾張領に侵攻していた駿河の今川勢を、家督をうけてまもない信長が村木城にやぶったときのことについての記述である。^{③⑨}は、永禄十一年に入洛したおりに、領国の関銭などを廃止したことについてである。^{④⑥}は、正倉院の名香蘭奢侍をもちだして切りとったことについてである。^{④⑦}は、目明きの檢校から巻きあげた黄金二百枚を、宇治橋の再建費用にあてたことについてである。これらのうち^{④⑤}は、「へりくだり」の用法とかがえてよいものであるが、それをふくめてそれぞれについて、信長の特筆すべき事績と認識する太田牛一の賛同・尊敬の念が、「候^レ訖」にこめられていると感じられる。

おなじ太田牛一による『太閤さま軍記のうち』に見られる五例の「候らひおはんぬ」も、豊臣秀吉に対してのおなじような性格をもつ。

それでは、「サフラヒヲハンヌ」が、これまでのべたようなさまざまなニュアンスをもつことができるようになったのは、なぜなのだろうか。それは、「了・畢・訖」などの訓「ヲハンヌ」が、完了の助動詞「ヌ」ばかりでなく動詞「ヲハル」から構成されていることのためとかがえられる。

さきにのべたように、古代漢語の「了・畢・訖」などの動詞には〈結果補語〉とよばれる、時制の助動詞に近似する用法が生じたのであるが、それが日本漢文にもとりいれられ、特に変体漢文でよく使用された。それらの字に定着した訓が「ヲハンヌ」なのであるが、それは、助動詞的な動詞であるこれらの漢語語彙の実態を、よくとらえていると言えるであろう。そして、それらの文字が日本漢文中に使用されれば、字づらからだけで、その文に表現された事態が終了した、あるいは過去におこったものであることが理解されたはずである。

漢文の語法としてはそれで問題がないとかがえられる。しかしながら、日本漢文は、字面は漢文でもその実際はそこに和語の訓をあたえて訓読し、日本語の文章として理解するものである。「了・畢・訖」については、それらが文末にあるばあい「ヲハンヌ」が浮かびでるしくみになっているのであるが、その際この語は、ばあいによって日本語としてふさわしくない感じをあたえることもあったとかがえられる。なんとならば、「ヲハンヌ」の「ヲハン」の部分には、「了・畢・訖」字の本来の字義のたすけもあつて、なお「ヲハル」という動詞の存在

がかなり濃厚に感じられたとおもわれるからである。すなわち、これらの漢字が動詞にともなつて助動詞的にもちいられるばあい、それを訓読することによって「動詞＋ヲハル」のくみあわせが出現することになるのであるが、それが日本語としては不自然であると意識されるばあいもあったとかがえられる。すなわち現代語で、「目などが覚める」「死ぬ」「生きる」「思う」「行く」「帰る」などには、「おわる」はつきにくい。そのような複合動詞の表現が成立するとすれば、それはかなり特殊な事態についてである。この事情は古代語でもほとんどおなじことであつたろう。

右のような事情をうらづけるものとして、つぎにしめす『古事談』と『宇治拾遺物語』のなかの、同内容の説話に見られる例をあげたい。

③⑧翁登高座、講説之間、梵語ヲ囁ケリ。法会中間午高座上、化失了。

・即、講説のあひだ、梵語をさへづる。法会の中間に高座にして忽に失をはりぬ。

(宇治拾遺物語・一〇三・東大寺花厳会事)

この二つの説話は、表記様式はことなるが、古事談の方を出典としている、同文的な関係にあるそれとかがえられる。このばあい、古事談の「化失了」では、「了」により事態が過去におこったことを表現しているとうけとつて、あまり抵抗感がない。しかし、おなじことを言っているはずの「失をはりぬ」にはそれがかなりあるとおもわれる。そうなる理由は、前者の「了」が字づらよりして漢文中の助動詞的な要素と意識され、

軽くうけとめられやすいのに対し、「をはる」が露出した後者の「をはりぬ」は、日本語として意識されやすいからである。

そして、その「をはる」は「失す」に付着したかたちでは日本語の普通の動作表現として存在しにくい。そして、日本漢文中でも「ヲハルヌ」中の「ヲハル」がつよく意識されれば、これとおなじような事態がおこり、奇妙な感じをあたえることがあったとかがえられる。

「ヲハル」がつきにくくない動詞でも、「ヲハルヌ」が直後に付着するかたちは、必要以上に動作の終了を感じさせることがおこったはずである。たとえば、「書キヌ」「見ヌ」と「書キヲハル」「見ヲハル」とは、似ていてもおなじで意味内容ではありえない。「ヌ」が〈時制〉表現として動作の〈完了〉を言うのに対し、「ヲハル」は動作の終了を〈叙述〉そのものとして言っているのである。したがって、「書了（カキヲハルヌ）」「見了（ミヲハルヌ）」などが「書く」「見る」をめぐる時制表現としてたちあらわれたばあい、そこに「ヲハル」という余計な要素がふくまれている感じをあたえがちだったとおもわれる。

そのような「ヲハルヌ」につきまとう余剰感は、日本語表現としての日本漢文、特に変体漢文にあたらしい表現を生じさせたとかんがえられる。すなわち、その余剰感を「たしかに・間違ひなく……した……である」という、強調的なニュアンスをふくんだ表現として意識することもおおかつたとかんがえられるのである。この稿の筆者は、前稿で『今昔物語集』における「動詞十畢ル」の複合動詞のかたちで、前項動詞が「誦ス」

「書く」「読む」であるばあい、その動作の対象が法華經にほぼ限定されることを指摘した。これは、法華經に対する諸行為が、説話でのべる奇跡的なできごとの発生と密接にかかわる行為として、強調して叙述される必要があったために生じた現象とかんがえられる。このような表現がなりたち得たのは、基本的に漢文訓読調の語であった「ヲハル」の、みぎにのべたような変体漢文における動向と無関係ではないとかんがえられる。

ただし、そのことを実際の変体漢文中で「ヲハルヌ」の単なる時制表現の例から区別して実証的にしめすことは、不可能とも言ふべき難事である。その理由は、基本的に漢文の語法・語序によつて文をつづる変体漢文は、完全な日本語文のばあいよりも文脈の意味のよみとりがむずかしく、それも読解者の気分左右されるやすい面があるからである。しかし、古来より売買文書などによく見られる「渡了」「納了」「請了」などの表現は、そのようなニュアンスが濃厚であるようにおもわれる。わずかに、覚一本平家物語に見られるつぎの例は、時代もくんだり文章様式もことなるが、そのような用法の存在をたしかにしめているもののようにおもわれる。

③ 次に刀の事、主殿司にあづけをきをぬ。是をめし出され、刀の実否について咎の左右あるべきか。

（覚一本平家物語・巻第一・殿上聞討）

これは、会話文中にあらわれる例で、「かしこまり」の表現とも、あるいは不満のそれともうけとることのできる例であるが、基本的には「間違ひなく……しました」と言っているそれ

と理解される。いずれにしろ、単なる終了や〈完了〉とはちがったニュアンスが感じられる。

そして、このような「ヲハンヌ」が謙讓表現にもなつてあらわれたばあい、謙讓表現のもつニュアンスはさらに強調されるようにおもわれる。たとえば、つぎにしめす④⑤の「承了」（ウケタマハリヲハンヌ）のばあいなど、「たしかに通知を拝見しました」というぐらいの意味になるであろう。これは、「謹」の意味と矛盾せず、ほとんど「へりくだり」の表現である。④⑤も同様のニュアンスをもつようにおもわれる。また、尊敬表現に「ヲハンヌ」がともなえば、④⑤のように尊敬の意味がさらにつよめられたようにおもわれる。

④⑥ 教書今日到来事

右、委旨謹承案内畢、恐辭之甚□□所言上而已。

（平安遺文・八二〇・伊賀守小野守経解・天喜四年

④⑦ 仍奉迎本寺、以可安置之者、所陳之旨、已有其理。即以承曆二年十月八日奉迎之、奉安置後大廚子内畢。

（同・一一五四・法隆寺政所注進状案・承暦二年

④⑧ 爰為章朝臣為国司之時、俄以収公。寺家依奏聞此由、重被下宣旨、被停彼妨畢。

（同・一七七三・宣宣旨案・天永三年

④⑨ 爰康和四年、任住古例、免除所当地子官物并臨時雜役、可為寺領之由、新被下宣旨畢。

（同・一八一・太政官牒・永久二年

このような敬語文に「ヲハンヌ」がともなうのは、『平安遺文』によれば謙讓表現は平安後期から、尊敬表現については院

政時代からあらわれるようである。それは、当然「候了・畢」などの成立に先行する。

八

〈候文〉について、この稿の筆者は、それが学問的にはどのようなものを使うのか、またそれは、いつの時代に成立したのかなど、いまだ未解決な問題もおおいと感じている。

すなわち、前者の問題については、変体漢文の書状などの典型的な例はともかくとして、「候」をおおく使用する漢字仮名まじり文を、そのようによび得るのかどうかなど、かんがえるべきことはのこっているとおもわれる。後者のそれについては、通説としては鎌倉時代の成立が言われている。しかし、この稿でこれまで見てきたところからすると、それは院政時代のこととすべきようにもおもわれる。なんとならば、「候了・畢・訖」の「サフラヒヲハンヌ」の用例は、その時期からかなり多数存在すると言えるのであるが、そのような語法があらわれるのは、丁寧語「候」が変体漢文中に大量に使用されるようになったことをぬきにはかんがえられないからである。

それはともかくとして、問題をこの稿の本来の線にもどせば、候文が成立して一文中に「候」と「了・畢・訖」が共存するようになった際、「候了」「候畢」などの順序はあり得ても、「了候」「畢候」などの順序はあり得なかった。その理由は、古代漢語の結果補語の文中での位置は、ほぼ文末にかざられているからである。字づらの構文を漢語法に依存する変体漢文にあつ

ては、その位置はうごかしがたかったはずである。また、日本語の語順の問題としても、助動詞「ヌ」は丁寧語「サフラフ」の前には位置し得ない。したがって、「ヲハンヌ」は「サフラフ」の後に位置するしかなかったのである。「動詞十ヲハリサフラヒヌ」とする語順は、「ヲハンヌ」がほとんど一語となっていて分割しがたいものである以上、変体漢文の構文としてはあり得ないのである。

「サフラヒヲハンヌ」という語順が成立したのは、最初は文末に「ヲハンヌ」をおく文の丁寧表現としてであるとかんがえられる。そして、そのことは、「ヲハンヌ」をさらに助動詞化する方向にもはたらいたとかんがえられる。その理由は、右のべたように、日本語の丁寧語「候」の後に位置しうるのは、助動詞の類であるのが本来であるために、その構文上の位置をしめる「ヲハンヌ」は、自然とさらに助動詞的にうけとられるはずだからである。

しかしながら、さらに助動詞化したといっても、「ヲハル」の意味が完全にうしなわれたとはかんがえられない。それは前節でのべた理屈とおなじことであるが、この語によつて生じる「ヲハンヌ」にまつわる余剰感はおお残りして、「候」をふくめた直前の表現の意味をつよめたとかんがえられる。丁寧語の「候」をつよめれば、そこにどのような現象がおこるかは、現代語の「(一人称主体)……してますです」や「(一人称主体)……ましてございます」のばあいから類推される。これらの言いかたは、「過剰敬語」などとされるものであるが、実際の発話であり得るものである。これらのばあいにおける「です」お

よび「ございます」は、丁寧さをつよめることを意図して附加されるものであろうが、それは結果として「丁寧」というよりは「へりくだり」などの意味になつてしまう。

「候了」などの「ヲハンヌ」は、時制表現であると同時に、直前の「候」をつよめて「へりくだり」などの表現と化させたのである。院政時代の「さぶらふ」は、現代語の「です」^⑬「ます」よりも敬意の度合いがつよかったようであるから、そのようなことはおこりやすかつたとかんがえられる。そして、それにより「ヲハンヌ」自身もそのような表現と化して、「サフラフ」と一体化したのではあるまいか。

文書における古い用例から見て、それが謙譲の文から発生したとまでは言えないが、「候」以前が謙譲表現であるばあいは、敬語表現としての性質のちかさからして、「サフラヒヲハンヌ」は、「へりくだり」化しやすかつたとかんがえられる。ちなみに、きわめてよくあらわれる「承候了・畢」などは、現代語に訳すれば「うけたまわりましてございます」「承知いたしましたましてございます」などにあたるとおもわれる。この「ございます」は、あきらかに「へりくだり」表現である。

一方、「ヲハンヌ」の余剰感は、さきに⑭⑮などに見たように「サフラヒヲハンヌ」が尊敬や丁寧の意味をつよめているとおもわれる用法もうみだしている。「候」以前が尊敬文であるばあい、「サフラヒヲハンヌ」は、「候」をつよめても対極の意味である「尊敬」の影響のために「へりくだり」化させることはできず、むしろ尊敬の意や丁寧さをつよめる方向にはたらいたとおもわれる。たとえば⑭は、「その御様子は、ほとんど謙

倉將軍家の鶴岡宮御参詣のそれを超えられてございます。」というぐらゐの意味であらう。これは、「丁重」とよぶべき用法であらうとおもわれる。

そして、③や⑭のばあいにもみるような、善・悪両方のものごとに対する、動作主体の「おもいいれ」の用法は、敬語表現をとまなわなない「サフラヒヲハンヌ」から、「へりくんだり」の用法と並行的に発生したものではないかおもわれる。このような用法は、最近の用語で言えば、「ムード」^⑮にかかわるそれということになるであらうが、このことについては、余剰感の問題のほか、「けり」「ぬ・つ」「た（り）」などの日本語の「過去辞」がもつ、そのようになりやすい性質も考慮にいれなければならぬかもしれない。「ヲハンヌ」が過去辞と共通する性格をもつようになっていたとしても、それは当然のことであり、自然なことであらう。

調査の範囲および量が十分とは言えがたいことのためもあるであらうが、『信長公記』『太閤さま軍記のうち』以後の江戸時代の文献からは、この稿の筆者は「サフラヒヲハンヌ」の例を発見していない。この二文献の著作者太田牛一そのものが、江戸時代の人というよりは室町時代の人と言った方がよいようなものであるから、結局江戸時代では用例を発見していないことにもなるが、その事態についてはつぎにしめす伊勢貞丈の言が参考になる。

候 畢 貞丈云、或候畢、或候訖とあるを、さふらひをはんぬとよむはわろし。さふらひぬ、とよむべし。又上りのよみくだしに依て、さふらひき、とよむべき所もあるべし。

し。

これによれば、伊勢貞丈は、「候畢」の「へりくんだり」的な意味ばかりか、「畢」などに対する「ヲハンヌ」という訓さえみとめていないことになる。これは、同様に「へりくんだり」などの意味内容をまったく見おとして、日葡辞書の「ヲハンヌ」のあつかいを、さらに一歩すすめたものということになる。また、「過去・完了」の事態であれば、すべて「候了」を使用してしまふようになる『言継卿記』のありかたにも通じることになる。最初にのべたように、「候」そのものが「過去・完了」の用法をもち、「サフラヒヌ」とも読めるのであるから、これでは「了」など使用しない方がましなことになるてしまふ。

なにゆえに、そのように「サフラヒヲハンヌ」は、すてられる傾向になつてゆくのであらうか。それは、そのニュアンスのとらえがたさのためとおもわれる。その語形が、ばあいによりさまざま意味をになうことは、以上にのべたとおりであるが、その語形の長さの割りにはその意味内容は認識・識別がたい。したがって、この語法は把握しにくく、継承しにくい面があり、次第に使用されなくなつたのであらう。

用法が把握しにくいのは、「ヲハンヌ」単独の場合についても言い得ることである。この稿のこれまでの論述でもその一端をのべたように、「ヲハンヌ」にも「サフラヒヲハンヌ」とほとんど同様な各用法が成立したようにも見える。しかしながら、それらを「ヲハンヌ」の単純な時制的な用法と区別することは、「サフラヒヲハンヌ」のばあいよりもはるかに困難であり、その詳細は今後の考究が必要である。

単独の「了・畢」は、江戸時代にも奥書・書写識語などでは「完了」の表現としてもちいつづけられている。それらでの使用は、おそらくは明治にまで達したものとおもわれる。しかしながら、江戸中期以降の書簡や地方文書などを、個人全集や史料集などで瞥見してみると、そこに採集されている〈候文〉によるそれらには、「ヲハンス」は使用されていないといつてよい状態である。江戸時代の〈候文〉は、庭訓往来の普及にもかかわらずその点では変体漢文の伝統から断絶していることになるが、それはある意味で納得のゆくことである。すなわち、一字が決った一語を表記する傾向をつよめ、慣用的な言いまわしを多用し、返読の語法も極力さけて、簡潔で一種機能的な〈文休〉を形成していった江戸の〈候文〉にとつて、さまざまに読解される可能性のある「ヲハンス」や「サフラヒヲハンス」は、すてなければならぬ語法であつたのであろう。

「サフラヒヲハンス」がすてられたのは、当然「ヲハンス」がすてられる以前であらう。その消滅は、あきらかに、変体漢文が獲得した日本語的な表現要素の喪失であるが、長つたらしく多義的なこの語法を、日本漢文上で運用・継承するのは、すこし無理があつたということでもあるとおもわれる。

注

- (1) この稿での引用は、土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』（三省堂）による。
- (2) Youannu. ヲハンス（雅んぬ） 時き咄端で語を示す助語。
（森田武他訳『邦訳日葡辞書』による）
- (3) この稿での「へりくんだり」とは、大石初太郎氏「敬語」〔ちくま文庫

版による）の「謙譲語B」の機能（「話し手あるいはそれ側の人を低く待遇することによって聞き手に敬意を表する」）が、実際の文において聞き手などにあたえる意味内容を言う語である。

- (4) ただし、「貴方」を「恵方」とおなじ意味の語とする説（『庭訓往来抄』・藤岡牛「庭訓往来具注鈔」）もある。

- (5) 佐藤武義「雲州往来二種」（勉誠社文庫）の「解説」参照。

- (6) 菅原為長の撰とされる語句集「消息詞」（日本教科書大系「往来篇」第2巻による）には、「御教書之旨、謹以承候了」という語句が収載されている。なお、この文獻にはそのほかに「賜候畢」「給預候訖」「思忘候了」がしめされているが、この文獻には伝本によつてはさらに多くの同様な語句がしめられているようである。

- (7) この例の「候」については、森野宗明氏が、丁寧語的な用法のもっとも早いものとして指摘している（「丁寧語「候ふ」の発達過程について」国語学68・昭和四十二年）。したがつて、この例は、二重の意味で最古の例ということになるが、それはありにくいことである。

- (8) 服部英雄「未来年号考」（古文書研究）第二〇号・昭和五十八年二月

渡辺滋「文書を書くこと・読むこと」（『駿台史学』第一二六号・平成十七年十二月）

- (9) ただし、「言繼卿記」の本文でも、「新訂増補言繼卿記」巻五・六の「補遺一・二・三」においては、「候了」はまったくちいられていない。したがつて、「言繼卿記」については伝本による問題も存在するかとおもわれる。

- (10) 保元物語（保元物語総索引）・平治物語（平治物語総索引）・寛一本平家物語（平家物語総索引）・延慶本平家物語（延慶本平家物語・索引篇）・義経記（義経記文節索引）・曾我物語（曾我物語総索引）・法華百座（法華百座聞書抄総索引）・三教指帰注（三教指帰注総索引及び研究）・宝物集（宮内庁書陵部蔵本宝物集総索引）・古今著聞集（古今著聞集総索引）・発心集（発心集本文・自立語索引）・十訓抄（十訓抄本文と索引）

- (11) 松城俊太郎「古消息の『併』字」（新潟大学国語国文学会誌）第三十

号・昭和六十一年三月)

(12) 調査は、戦国史料叢書1・「太閤史料集」による。

(13) 「畢ル」への翻訳―出典文献の〈結果補語〉から今昔物語集へ―

(「国語国文」平成十七年七月)

(14) 平安後期から院政期にかけて「候(さぶらふ)」が丁寧語として伸長してゆく様相については、注7に示した森野宗明氏の論考に詳しい。

(15) ②③④の例は、あるいはこの段階の用例とすべきものであるかも知れない。

(16) 注7に示した論考参照。

(17) 「丁寧」という用語を、この稿における「へりくだり」とおなじようにとらえる説もあるが(菊池康人「敬語」IV-1「講談社学術文庫版による」)、この稿の筆者は、そのように尊敬にともなう丁寧さをつよめるばあいについて、それを、あるいはそれをも、「丁寧」とよぶのが適当ではないかとかんがえる。

(18) 寺村秀夫「日本語のシンタックスと意味」Ⅲ・付録「タ」の意味と機能(一九九一年・くろしお出版)

金水敏「いわゆる「ムードの「た」について」(『東京大学国語研究室創設百周年記念国語学研究論集』)

(19) 書簡文については、契沖(『契沖全集』第八・九卷「朝日新聞社」)、松尾芭蕉(『日本古典文学大系』『芭蕉文集』)、本居宣長(『本居宣長全集』第十七卷「筑摩書房」)を、書簡体の文学作品として『万の文反古』(『日本古典文学全集』井原西鶴集③)「小学館」を、江戸時代成立の手紙文の教本としては『初学文章並万葉方目録』(『日本教科書大系』「往来篇」第五卷)を調査したが、いずれの資料にも「ヲハンヌ」は見いだされない。

◎この稿で引用した翻刻・複製

庭訓往来(『新日本古典文学大系』庭訓往来 句双紙)、貴嶺問答・新十二月往来・山密往来・庭訓往来諸抄大成扶翼(『日本教科書大系』「往来篇」第1・2・3巻)、後二条師道記・殿暦(『大日本古記録』言継卿記(『新訂増補言継卿記』)、覚一本平家物語(『日本古典文学大系』「平家物語」)、古今著聞集(『日

本古典文学大系、信長公記(改定史籍集覧第十九冊)、古事談(『新訂増補国史大系』宇治拾遺物語(『御所本うち拾遺物語』笠間書院)

(ふなぎ しゅんたろう 新潟大学文学部)